

2022年5月29日 復活節第7主日礼拝

メッセージ「人となり 他人と異なり 一つとなる」

岡嶋千宙伝道師

聖書 ヨハネによる福音書 17章 20-26節

先週の金曜日、20日の夜、オンラインで、ある会合に参加しました。関西学院大学のレインボーウィーク10周年記念パネルディスカッションです。関西学院大学レインボーウィークとは、「性・セクシュアリティ・ジェンダーに関する知識や認識を学内で深め、マジョリティ・マイノリティに関わらず、それぞれに異なるセクシュアリティやジェンダーを持つ人たちが居心地良くいられる環境を整えること」を目的として行われているイベントです。10年前の2013年からはじめられ、毎年5月、「ホモセクシュアル嫌悪に反対する国際記念日（IDAHO）」にあわせて、西宮、聖和、神戸三田のそれぞれのキャンパスで、約一週間に亘って開催されるイベントとなっています。わたしは在学中から何度か運営に携わったことがあり、今回は、10周年記念のパネリストとして参加させていただきました。他の方々と共に、レインボーウィークのこれまでを振り返りながら、これからへの期待や願い、抱負を含めての思いを語り合いました。語り合いを通して、あらためて気づかされたのは、関わった人たちの背景の多様性です。セクシュアリティやジェンダーの違いはもちろん、どんなきっかけで関わるようになったのか、関わり始めた時どんな思いを抱いていたのか、何を期待していたのか、どんな関わり方をしたのか。そして、これから何を望むのか。パネリストはわたしを含めて8名いたのですが、誰一人同じ思いを持っている人はいませんでした。8者8様に異なる思いを持っていたのです。この10年間で実際に関わった人たちはもっといるはずなので、だとすると、何十、何百という異なる思いがこのイベントの背後にはあることとなります。異なる背景を持つ人たちが一つのイベント、一つの空間、一つの場を作り上げていく。10年の歩みは決して平坦ではなく、意見の対立や思いの食い違いがあり、何度かレインボーウィーク自体がとん挫するという危機に陥ったこともあった、とのことでした。わたしは、そんな危機があったということを知り初めて聞いたのですが、異なりを持つ者同士が、共にある場、共に生きる共同体を創り、維持していくことの困難さを痛感するとともに、だからこそ、その困難を経ながらも、一つの形として作り上げて継続

していくことの大切さを改めて感じさせられました。

今から約二千年前。中東パレスチナの地で、様々な背景を持つ人たちに囲まれながら、自分の周りに生きる人々が、さらにその人々の子孫たちが、共に手を取り合い、互いのために自分のために生き合うことのできる共同体を求めて生き抜いた人がいました。ナザレのイエス。そのイエスが求めたのは、それまで社会で考えられ実践されていた共同体とは全く異なるもの。大きな広がり、目を見張る新しさをもつ共同体。イエスの死後、現在に至るまで、長きに亘って人々に大きな影響を与え続けている共同体とは、どのようなものなのか。まずは、今回の聖書箇所<sup>すぎこしさい</sup>の背景を簡単に確認します。時期は、過越祭というユダヤの人々にとって、とって大切なお祭りが行われようとしているとき。後に、このお祭りが行われる直前に、イエスが十字架にかけられて処刑されることになるので、イエスがこの世で歩みをなしたその終盤です。時刻は夕食時。いわゆる「最後の晩餐」の場面。イエスが弟子たちとの食事をしながら、語っています。『ヨハネ福音書』の13章から17章には、そのときのイエスの言葉が記されていて、13章から16章が弟子たちに向けての言葉、17章が弟子たちのために神に向けたイエスの祈りの言葉となっています。17章は、弟子たちへの教えではなく、イエス自身の思いと願いが込められた言葉。極めて個人的なイエスの思い、人としてのイエスの思いがにじみ出ている、と考えるても差し支えないでしょう。

この祈りの言葉の中で、イエスが描いた共同体の特色を一言で表せば、「一つとなる」共同体です。その特徴を探るために、ここでは、三つの点に着目します。一つ目は、祈りの中で語られている人物の多様さです。20節の「彼ら」と「彼らの言葉によって信じる人々」。前者「彼ら」とは、この場で、イエスの語りを直接に聞いていた人たち、つまりイエスの弟子たちです。その弟子たちの言葉によって信じる人々というのは、直接の弟子ではないけれど、弟子たちの証言を通して、後にイエスを信じるようになる人々のことです。意図されているのは、まずは『ヨハネ福音書』が宛てられた人々ですが、それ以降の人々、つまり今この場で礼拝をしているわたしたちも含まれます。24節で「わたしに与えてくださった人々」とあるのは、20節の「弟子たち」と、そしてその弟子たちを通して信じるようになった、わたしたちのよ

うな後の人々との両者を含む表現と考えられます。さらに登場する人物としては、イエスが「父」と呼び「あなた」と呼びかける神。「わたし」であるイエス自身。そして弟子でもなく、まだ信じる基盤が整ってはいない「世」あるいは世の人々。今あげた人物たち。どれをとっても同じ存在ではありません。神とイエスは「一つである」とは言われながらも異なっているし、その神と人間は、またイエスとわたしたちは、全く異なります。異なる者同士が一つとなり、共同体を形成する。イエスが描く共同体は同一性ではなく、多様性に特徴付けられています。二つ目の着目点は、繰り返し使われている「～の内に」という表現。イエスにとっての父である神がイエスの内にある(21, 23)。弟子たちの言葉によって信じるようになった者らがイエスと神の内にある(21)。イエスがその者たちの内にある(23)。神(の愛)がその者たちの内にある(26)。ここで伝えられているのは、相互の交わり、相互関係です。しかもそれは外面的ではなく、「内に」ある交わり、つまり内面を含んだ全人格的な交わりです。この「内に」という関係は、「どちらか」が「どちらか」にと、一方的に固定されるのではなく、また、誰かと誰かとの関係に特定されているわけではありません。つまり、この関係は平等性のもとに成り立つものなのです。誰かが抜きん出て、他の誰かがそれに従属するというものでは、決してない関係性。三つ目に着目するのは、「愛する」ことと、「知る」こと。「内にある」関係を成り立たせるのは「愛」だと言われています。そして、その愛を育むのは、「知ること」であるとされます。『ヨハネ福音書』に描かれるイエスは、関わる人々、隣にいる人々のそばに留まる方です。留まって、その人の声を聴き、その人を知ろうとする方です。そして、それによって、逆に、自分自身を相手に知らせる方です。3章のニコデモ、4章のサマリアの女性、9章の生まれつき目の見えない人、11章のマルタ・マリア・ラザロ兄弟姉妹、そして13-17章の弟子たち。隣人のそばに留まることによってその声を聴き、共にあることで共同体のあり方を身をもって示したイエス。『ヨハネ福音書』では、神の愛の現れが「永遠の命」として語られます。そしてその「永遠の命」とは「神を、神によって遣わされたイエス・キリストを知ること」(17:3)であるとされます。イエスを知り、神を知り、そして、他者を知り、愛の内にある共同体が築かれていく。

イエスが求めた「一つとなる」共同体。その特色をより明確にするために、現在、わたしたちが住む世界で多く存在している共同体のあり方と比べてみます。まずは、「一つとなる」ことの違いです。現代でも、「一つとなる」ことはよく語られます。ですが、決定的に違うことがあります。現代で、一つとなるというとき、往々にして多様性が排除されます。均質性が求められ、少しでも異なるところがあれば、嫌悪や攻撃の対象となります。均質性を確保すること、異なりを排除することが、「一つとなる」ことへの原動力となっているのです。民族主義、ナショナリズム、自国優先主義、など、見渡せば、その例はいくらでも目にすることができます。そんな、多様性の排除される共同体において築かれる関係というのは、利益・利潤、経済価値、生産性に基づくものです。個々人の内面を含めた全人性ではなくて、外に現れる、数字で還元できるような、しかもある一面だけを切り取った価値観に支配された関係。その関係を持続させるのは「知る」ことではなく、「利用する」こと。それぞれが「わたし」としての利用価値を判断材料にして他者との関係を築いていく。互いに利用することを求めるがゆえに、疑心暗鬼になり、時に対立や争いにまでつながっていく。「勝ち組」「負け組」という構造が生まれ常態化し、勝ち残れなかった者たちは、社会の周縁に追いやられ、その声を、存在を、命を消されていく。ないものにされていく。「個」を大切にすることでは、間違いではないのかもしれませんが、けれども、その個の確立の仕方が一面的で一方向的であるがゆえに、かえって、個々人が生きづらさを背負わざるをえない状況に追い込まれていく。そんな現代の世にあって、イエスが祈り求めた共同体は、教会という形でこの世に存在していることになっています。教会は、この世にある共同体とは全く異なるもの。異色の輝きを放つ集団。違うという感覚を人々に抱かせ、そして時に、特に、この世の共同体のあり方に疲れた人たちにとって、安らぎとなるような魅力を発しているはずです。人々に、このままではいけないという思いを抱かせる力となっているはずです。イエスは、確かに、教会がそのような姿となることを望んでいました(23節)。今も望んでいます。教会は、愛を知らせる共同体です。愛の内に、互いを知ることのできる共同体です。違う者同士が、その違いを排除せずに、違うままで共に生きることができる共同体です。その共同体によって形成される世界を、その世界が可能であることを、証しする者たちの集まりとしての教会。

冒頭で触れた関学レインボーウィーク。わたしが関わるようになったきっかけをくれたのは、4年前の1ヶ月ほど前に、神様のもとに旅立たれた榎本てる子さんです。関学時代の恩師で、在学中も卒業後も、いっぱいお世話になって、いっぱい影響を受けて、今もたくさんの影響を受け続けているてるちゃん。てるちゃんがいなければ、今こうして、皆さんの前で語っている、ということもありませんでした。先週のパネルディスカッションに参加するにあたり、また、本日の準備をする中で、てるちゃんの言葉を思い出しました。一つは、関学時代に、ある授業の評価として残してくれたものです。そのままではないですが、要約すると次のような内容の言葉です。「現実社会で出会う他者も、自分の中にいる他者も、どちらも大切にしてほしい。そして、どちらの他者とであっても、それぞれとの交わりの中で得る体験を、自分で消し去ることなく、活かし・生かしてほしい。」もう一つは、てるちゃんが旅立つ約1年前、55歳の誕生を祝うパーティで語った言葉です。「本当に人っていうのは、愛されて愛していくなかで生きていくんだなって。そういうコミュニティをわたしはもらえてすごい感謝ですけども、色んな人たちが、やっぱり一人ひとりが、そのコミュニティを求めていると思うので、色んな人たちが自分たちの場で、愛して愛されるコミュニティってものを創っていつてもらえたらな。」

この2つのてるちゃんの言葉。イエスの祈りに通じるものがあると感じます。てるちゃんから言葉をもらってから4年以上。その言葉とともに、イエスの祈りに触れてみて、今、果たして、てるちゃんが、そしてイエスが求める共同体の中に、自分は生きているのだろうかと自問自答したくなります。そして、その問いに対する自分の答えに自信はありません。だからといって、希望を無くしているわけではありません。道が塞がっているわけではありません。イエスは、わたしたちのために、一人ひとりが、互いに愛し愛される共同体の中に生きていくことを、祈ってくれたのです。他の誰でもなく、イエスが祈ってくれた。神の子、神のひとり子と言われるイエスの祈り。その祈りを神が聴いていないわけがありません。イエスの祈りの言葉は、すでに神の内であって、現実のものとなっているはずなのですから。今でも、てるちゃんを通して与えられた関係がわたしを包んでくれています。わたしの目の前にいらっしゃる久宝教会のお一人お一人、そして、インターネットを介して繋がっている方々との関係もその一つです。これから、この関係をどのように展開させていくのか。この

先に出会う、他の方々との間にどんな関係を築いていくのか。そして、その築いた関係をもとに、わたしは、わたしたちは、イエスに連なる教会として、どんなメッセージを、この社会に、この世界に発していくのか。今改めて、見つめ直す必要があるのだと感じます。真逆の方向に突き進む風が強く吹きあれる中で、イエスが望み求める教会の姿を、人となったイエスが、異なりを持つ者たちと共に築き上げ、そして、祈りの中でわたしたちに継承してくれた共同体の姿を、皆様と共に、描き築いていきたいと願います。